

## 原因の「～で」と「～ことで」について

杉 本 武

### 1. はじめに

格助詞「で」の用法として、次のような原因を表すものがある。

- (1) 太郎は風邪で学校を休んだ。
- (2) 突風で建物が倒壊した。

一方、「で」は、次のように「～ことで」の形でも用いられる。

- (3) 台風が四国沖に接近したことで避難指示が出された。
- (4) 部長が欠席したことで会議が中止になった。

これらは、一見すると、(1)の「風邪」、(2)の「突風」が名詞句であるため、そのまま「で」を伴い、(3)の「台風が四国沖に接近した」、(4)の「部長が欠席した」が補文であるため、単に「こと」によって名詞化した上で格助詞「で」を伴っているように見える。実際、次のように「～で」と「～ことで」が置き換え可能な場合がある。

- (5) a. 株の暴落で太郎は大損した。
- b. 株が暴落したことで太郎は大損した。

しかしながら、冒頭の例は、それぞれを補文、名詞句に置き換えると、相対的には若干不自然になる。

- (6) ? 太郎は風邪をひいたことで学校を休んだ。
- (7) ? 突風が吹いたことで建物が倒壊した。
- (8) ? 台風の四国沖への接近で避難指示が出された。

(9) ?部長の欠席で会議が中止になった。

このような違いからは、「～ことで」は、単に補文を名詞化したものが原因の格助詞「で」を伴っているとは考えられない可能性がある。本稿では、このような「～で」と「～ことで」の用法等の違いを明らかにした上で、両者は、文法的、意味的な性質が異なることを示したい。

## 2. 原因の「で」の位置づけ

本節では、分析に先立ち、原因の「で」の格助詞「で」の中での位置づけを明確にしておきたい。格助詞「で」には、いくつかの用法があるとされる。必ずしも網羅的なものではないが、中心的なものとして以下のような用法が挙げられる。

- (10) a. 庭で花火をした。 (動作・出来事の場所)
- b. 近所で火事があった。
- (11) a. ナイフでパンを切った。 (手段)
- b. バスで東京に行った。
- (12) a. 折り紙で鶴を折った。 (材料)
- b. サツマイモで焼酎を作った。
- (13) a. 風邪で仕事を休んだ。 (原因)
- b. 強風で街路樹が倒れた。
- (14) a. 1時間で山頂に着いた。 (範囲)
- b. 2人で一皿の料理を食べた。
- (15) a. この問題は我々で対処します。 (動作の主体)
- b. 国会でこの法案を審議している最中だ。

本稿で取り上げるのは、(13)のような「原因」の用法の「で」であるが、これは、(11)のような「手段」、(12)のような「材料」の用法と、動作の成立に媒介するものとして共通性を持つ。また、次のように、これらの用法の「で」は一文中共起しない。

- (16) a. のみで仏像を彫った。 (手段)

- b. 木切れで仏像を彫った。(材料)
  - c. \*木切れでのみで仏像を彫った。
- (17) a. バスで振り替え輸送を行った。(手段)
- b. 列車事故で振り替え輸送を行った。(原因)
  - c. \*列車事故でバスで振り替え輸送を行った。
- (18) a. 材料不足で製品を作れなかった。(原因)
- b. 代替素材で製品を作った。(材料)
  - c. \*材料不足で代替素材で製品を作った。

これらの点から、「原因」「手段」「材料」の「で」は、同一の格助詞であり、本稿の範囲ではないため、詳しくは論じないが、それぞれの用法の違いは、動詞の意志性や名詞句の具象性などによるものと考えられる(山梨(1993)、山田(2003)を参照)。

なお、矢澤(1994)は、次のように述べて、デ格の各用法は同一の格であるとしている。

デ格は、基本的に「動きの仲介・媒介」を表す意味表示格と考えられ、これが名詞や動詞、階層などのあり方によって、「道具」「原料」「手段」「場所」「原因」などの意味に解釈されると考えられる。(矢澤(1994:101))

本稿では、本稿の範囲からはずれるため、詳しくは論じないが、「場所」とそれ以外の用法は、異なった格助詞であると考えられる。ただし、矢澤(1992)が指摘している、デ格が複数共起する現象についてのみふれておきたい。矢澤(1992)は、次のように述べた上で、以下のような例を挙げている(ここでは、「原因デ格」の例のみを示す)。

場所デ格や原因デ格は主体の前後に複数現れることができる。ガ格の前に現れたものは出来事全体が生じる場や原因を表すことが多く、ガ格の後に現れたものは動作・作用が実現する場や理由を表す。両者を逆転させると不自然になりやすく、また、両者をガ格の前後に位置させる形がもっとも許容度が高い。(矢澤(1994:107))

- (19) a. 大寒波で 多くの人が風邪で寝込んだ。

- b. ?風邪で多くの人が大寒波で寝込んだ。
- c. ?多くの人が 大寒波で風邪で寝込んだ。
- d. ?大寒波で風邪で 多くの人が寝込んだ。
- e. 大寒波で 風邪で多くの人が寝込んだ。

(矢澤 (1994:107))

「大寒波で」の後のスペースがポーズを示しているのであれば、筆者の内省では、このようなポーズを置いたとしても、自然とされている(19a)(19e)も、やはり格の重複感があり、若干不自然に感じられる。また、ポーズを置かない場合は、許容し難い。ただし、矢澤(1994)の議論の趣旨は、a., e.のように、ガ格の前に現れたデ格が「出来事全体が生じる場や原因」と解釈され、b., c., d.のように、この語順を逆転させると不自然になるというものであり、両者の許容度に差があることは認められる。本稿では、このような原因の「～で」の共起は基本的に許されないと考えるが<sup>(1)</sup>、ガ格の前後という位置の違いにより「～で」の解釈に異なりを認めている点は注目される。

次に、山田(2003: (14))は、「起因」(本稿の「原因」)の「で」の用法として、次のようなものを挙げている。

- (20) 強い風で看板が倒れた。(事態の原因)
- (21) 急用で家に帰った。(行動の理由)
- (22) 療養で温泉に行った。<sup>(2)</sup>(行動の目的)
- (23) 紙で手を切った。(非意志的事態生起の媒介物)

以下では、このような「で」の中でも「原因」を表す場合を対象とするが、これと手段の「で」との関係については、5.で述べることにする。

### 3. 「～で」と「～ことで」の違い

#### 3.1. 直接的な原因と間接的な原因

1. でも示したように、「～で」と「～ことで」は置き換えると不自然になることがある。本節では、どのような場合に置き換えがしにくいのかを明らかにする。

まず、1.で「～で」から「～ことで」への置き換えがしにくい例として示

したものを再掲する。

- (24) a. 太郎は風邪で学校を休んだ。  
 b. ? 太郎は風邪をひいたことで学校を休んだ。<sup>(3)</sup>
- (25) a. 突風で建物が倒壊した。  
 b. ? 突風が吹いたことで建物が倒壊した。<sup>(4)</sup>

これらは、不自然であるが、「～ことで」および動詞はそのままだに、以下のようになると自然になる<sup>(5)</sup>。

- (26) 太郎は、風邪をひいたことで、行きたくなかった学校を休んだ。  
 (27) 突風が吹いたことで、もともと老朽化していた建物が倒壊した。

これらの文では、「行きたくなかった」「もともと老朽化していた」という表現で出来事の直接的な原因が示されており、「風邪をひいたこと」「突風が吹いたこと」は、言わば「口実」や「遠因」であるような原因であり、その点で間接的な原因であると言える。

次に、「～ことで」が「～で」に置き換えにくい例を見てみよう。

- (28) a. 台風が四国沖に接近したことで避難指示が出された。  
 b. ? 台風の四国沖への接近で避難指示が出された。
- (29) a. 部長が欠席したことで会議が中止になった。  
 b. ? 部長の欠席で会議が中止になった。

これらも、以下のようにすると自然になる。

- (30) 台風の四国沖への接近でマニュアル通りに避難指示が出された。  
 (31) 部長の欠席で全員出席を要する会議が中止になった。

これらの例では、「マニュアル通りに」「全員出席を要する」という表現によって、「台風の四国沖への接近」「部長の欠席」が直接的に出来事の生起を決定することになる。

以上のようなことから、「～で」と「～ことで」は、いずれも原因を表すも

の、出来事との関係が異なり、「～で」は直接的な原因を示し、「～ことで」は間接的な原因を示すと言えるのではないだろうか。

### 3.2. 「～で」と「～ことで」の共起

前項で見たように、「～で」と「～ことで」が異なった意味を有するとすると、両者が共起することが考えられる。

- (32) a. 課長は部下の収賄で減俸になった。
- b. 課長は部下が収賄を行ったことで減俸になった。
- (33) a. 課長は部下の管理不行き届きで減俸になった。
- b. 課長は部下の管理が行き届いていなかったことで減俸になった。

上の例では、いずれも「～で」と「～ことで」をとることができる。しかしながら、同一の形式で二つの原因を共起させると、次のように非文になる。

- (34) \* 課長は部下の収賄で管理不行き届きで減俸になった。
- (35) \* 課長は部下が収賄を行ったことで管理が行き届いていなかったことで減俸になった。

一方、次のように、異なった形式で共起した文は自然になる。

- (36) 課長は部下が収賄を行ったことで管理不行き届きで減俸になった。

このことから、「～で」と「～ことで」は、文中で異なった機能を担っていると考えられる。

これに対して、(36)の「～で」と「～ことで」の内容を入れ替えた次の文は非文となる。なお、次項で述べるように、語順の問題があるため、二通りの語順で示したが、いずれも非文である。

- (37) a. \* 課長は部下の収賄で管理が行き届いていなかったことで減俸になった。
- b. \* 課長は管理が行き届いていなかったことで部下の収賄で減俸になった。

これは、「部下の収賄」が間接的な原因であり、「管理が行き届いていなかったこと」が直接的な原因であるにも関わらず、前者が「～で」、後者が「～ことで」の形で現れていることによると考えられる。

以下に、類例を挙げる。

- (38) 父親が倒れたことで看病でへとへとになった。
- (39) 大雨が降り続いたことで浸水で電車の運行を見合わせた。
- (40) 耐火素材を壁に用いなかったことで火の不始末で火事になった。

これらの例でも、「～ことで」が間接的な原因を示し、「～で」がそれに関わる直接的な原因を示している。

### 3.3. 語順

「～で」と「～ことで」は、文中で現れる構造的な位置が異なるのではないかと考えられる。まず、次の「～で」の場合を見てみたい。

- (41) a. 太郎が風邪で学校を休んだ。  
b. 風邪で太郎が学校を休んだ。
- (42) a. 建物が突風で倒壊した。  
b. 突風で建物が倒壊した。

a. は「～で」が文中、ガ格名詞句より後に現れたもの、b. は文頭に現れたものである。特に「～で」に強調を置くというような場合でない限り、a. のように文中に置かれた方が自然であろう。

一方、「～ことで」の場合、「～で」とは逆になるようである。

- (43) a. 避難指示が台風が四国沖に接近したことで出された。  
b. 台風が四国沖に接近したことで避難指示が出された。
- (44) a. 会議が部長が欠席したことで中止になった。  
b. 部長が欠席したことで会議が中止になった。

この場合、b. の「～ことで」が文頭に置かれた方が自然であろう。ただし、「～

ことで」の場合、節であり、重い (heavy である) ため文中に置きにくいという可能性もある。

次は、「～で」と「～ことで」が共起している例である。

- (45) a. 課長は部下が収賄を行ったことで管理不行き届きで減俸になった。  
 b. 部下が収賄を行ったことで、課長は管理不行き届きで減俸になった。  
 c. \* 課長は管理不行き届きで部下が収賄を行ったことで減俸になった。
- (46) a. 太郎は父親が倒れたことで看病でへとへとになった。  
 b. 父親が倒れたことで、太郎は看病でへとへとになった。  
 c. \* 太郎は看病で父親が倒れたことでへとへとになった。
- (47) a. JRは大雨が降り続いたことで水位の上昇で電車の運行を見合わせた。  
 b. 大雨が降り続いたことで、JRは水位の上昇で電車の運行を見合わせた。  
 c. \* JRは水位の上昇で大雨が降り続いたことで電車の運行を見合わせた。
- (48) a. この家は耐火素材を壁に用いなかったことで火の不始末で火事になった。  
 b. 耐火素材を壁に用いなかったことで、この家は火の不始末で火事になった。  
 c. \* この家は火の不始末で耐火素材を壁に用いなかったことで火事になった。

この場合、a., b.のように、「～ことで」が「～で」に先行している場合は、文法的であるが、c.のように、「～で」が「～ことで」に先行すると、非文になる。

以上のような点から、少なくとも、「～ことで」は、「～で」より文頭に近い位置に現れると言える<sup>(6)</sup>。格成分の文中での位置については、矢澤 (1992) の研究がある。矢澤 (1992) では、格の階層の点から、「具格のデ格」を「目的格」や「様態修飾成分」と同じく第2階層とし、第1階層である「結果修飾成分」の次に動詞に近い位置に置いている。上述のような「～で」の位置は、



この位置にあたると考えられるが、「～ことで」は、第4階層である「主格」より上、「時の成分」と同じ第5階層に位置づけられるのではないかと考えられる。

### 3.4. とりたて詞の後接

ここでは、「～で」「～ことで」にとりたて詞が後接するかどうかを見てみたい。格成分には、ある程度の制約はあるものの、とりたて詞が後接することができる。これを、まず「～で」について見てみよう。とりたて詞としては、「も」と「さえ」を用いる。

- (49) a. 太郎は風邪で学校を休んだ。  
 b. 太郎は骨折だけでなく、風邪でも学校を休んだ。  
 c. 太郎はたいしたことのない風邪でさえ学校を休んだ。
- (50) a. 建物が突風で倒壊した。  
 b. 建物が翌日の突風でも倒壊した。  
 c. 建物がこの程度の突風でさえ倒壊した。
- (51) a. 太郎は練習でへとへとになった。  
 b. 太郎は今日の練習でもへとへとになった。  
 c. 太郎はちょっとした練習でさえへとへとになった。

このように、「～で」の場合、問題なく、とりたて詞が後接する。

一方、次のように、「～ことで」の場合、とりたて詞が後接しない、あるいはしにくいようである。

- (52) a. 川の水位が警戒値に達したことで避難指示が出された。  
 b. ?(台風が接近したのに加え)川の水位が警戒値に達したことでも避難指示が出された。  
 c. \*川の水位がわずかに上がったことでさえ避難指示が出された。
- (53) a. 部長が欠席したことで会議が中止になった。  
 b. ?(情勢が変化したのに加え)部長が欠席したことでも会議が中止になった。  
 c. \*一部の社員が欠席したことでさえ会議が中止になった。
- (54) a. 大雨が降り続いたことで電車の運行を見合わせた。

- b. ?(風が強まったのに加え) 大雨が降り続いたことでも電車の運行を見合わせた。
- c. \*雨が短時間降ったことでさえ電車の運行を見合わせた。

「も」の場合、とりたてられる他者の想定のしにくさの問題もあり、括弧内にそれを示した。文法性の判定で示されるように、「も」と「さえ」では異なりがある。これは、とりたて詞が一律に「～ことで」に後接しないということではないことを示すが、これは、個々のとりたて詞の問題であると考えられる。

これと同様に、原因、理由を表す接続助詞には、とりたて詞が後接しない。

- (55) a. 部長が欠席したので、会議が中止になった。
- b. ?部長が欠席したのでも、会議が中止になった。
- c. \*一部の社員が欠席したのでさえ、会議が中止になった。
- (56) a. 大雨が降り続いたから、電車の運行を見合わせた。
- b. \*大雨が降り続いたからも、電車の運行を見合わせた。
- c. \*雨が短時間降ったからさえ、電車の運行を見合わせた。

この点を考慮すると、「～ことで」は格成分とは異なる性格、むしろ従属節に近い性格を持っているのではないかと考えられる。

### 3.5. 分裂文による焦点化

通常の格成分は、次のように、分裂文の焦点の位置に現れることができる。

- (57) a. 太郎が去年から花子に英語を教わっている。
- b. 去年から花子に英語を教わっているのは太郎だ。
- c. 太郎が英語を去年から教わっているのは花子だ。
- d. 太郎が花子に英語を教わっているのは去年からだ。

したがって、「で」の場合も、分裂文の焦点の位置に現れることができる。

- (58) a. 太郎が庭で花火をした。 (場所)
- b. 太郎が花火をしたのは庭(で)だ。
- (59) a. 花子がこのナイフでパンを切った。 (手段)

- b. 花子がパンを切ったのはこのナイフ(で)だ。
- (60) a. 花子が赤い折り紙で鶴を折った。(材料)  
b. 花子が鶴を折ったのは赤い折り紙(で)だ。
- (61) a. 太郎が風邪で仕事を休んだ。(原因)  
b. 太郎が仕事を休んだのは風邪(で)だ。

ところが、「～ことで」の場合、分裂文の焦点に現れることがない。

- (62) a. 台風が四国沖に接近したことで避難指示が出された。  
b. \*避難指示が出されたのは台風が四国沖に接近したこと(で)だ。
- (63) a. 部長が欠席したことで会議が中止になった。  
b. \*会議が中止になったのは部長が欠席したこと(で)だ。

この点からも、「～ことで」は「～で」とは異なった文法的性質を持つものであると考えられる。

#### 4. コト節のテンス

これまで、「～ことで」のコト節のテンスにはふれずに、全てタ形の例を示してきた。本節では、このコト節のテンスについて見ていきたい。

まず、次の文のように、原因は、通常、主節の表す結果の事態に時間的に先行するものであるので、(64 a)のようにコト節がタ形をとっても、(64 b)のようにル形をとらない。また、原因と主節の事態が並行的な場合は、多少落ち着きは悪いが、(64 c)のようにテイル形をとることもできよう。

- (64) a. 大雨が降ったことで地盤が緩んでいる。  
b. \*大雨が降ることで地盤が緩んでいる。  
c. 大雨が降っていることで地盤が緩んでいる。

しかしながら、次のように、時間的に後行する事態が原因となって主節の事態が引き起こされ得るような場合は、ル形も可能になる。

- (65) a. 部外者が参加したことで会議が混乱した。  
 b. 明日の総会に部外者が参加することで会議が混乱した。  
 c. 部外者が参加していることで会議が混乱した。

したがって、「～ことで」のコト節は、比較的自由にタ形、ル形、テイル形をとれることになる。

このような現象を、同じく原因を表す複合格助詞「によって」、原因、理由を表す接続助詞「ので」について見てみたい。まず、「によって」は、受動文の動作主、原因、手段、よりどころなどを表し、原因を表す場合、コト節をとることができる。ところが、次のように、コト節のテンスはタ形に限られる<sup>(7)</sup>。

- (66) a. 部外者が参加したことによって会議が混乱した。  
 b. \*明日の総会に部外者が参加することによって会議が混乱した。  
 c. ?部外者が参加していることによって会議が混乱した。

次に、「ので」を見てみよう。

- (67) a. 部外者が参加したので会議が混乱した。  
 b. 明日の総会に部外者が参加するので会議が混乱した。  
 c. 部外者が参加しているので会議が混乱した。

「ので」の場合、このように、コト節が自由にタ形、ル形、テイル形をとることができる。

これらの点を考えると、「～ことで」は、複合格助詞「によって」よりも接続助詞「ので」に近い性質を持つと考えられる。

なお、次のように、「～で」の場合、もちろんテンスはとらないが、次のような未来を表す時間副詞の共起を許す。

- (68) a. 部外者の参加で会議が混乱した。  
 b. 昨日の総会への部外者の参加で今日の会議が混乱した。  
 c. 明日の総会への部外者の参加で今日の会議が混乱した。

## 5. 原因の「～ことで」と手段の「～ことで」

これまで、「～ことで」は原因を表すとしてきたが、次のように、コト節がル形をとって手段を表すこともある。この場合、以下に示すように、とりたてて詞の後接、分裂文による焦点化を許す<sup>(8)</sup>。

- (69) a. 医師はワクチン(の投与)でウィルスの感染を防いだ。  
 b. 医師はワクチンを投与することでウィルスの感染を防いだ。  
 c. 医師はワクチンを投与することでもウィルスの感染を防いだ。  
 d. ?医師がウィルスの感染を防いだのは、ワクチンを投与することだ。  
 (?医師がウィルスの感染を防いだのは、ワクチン(で)だ。)
- (70) a. 登山隊は南寄りのルートで吹雪を避けた。  
 b. 登山隊は南寄りのルートをとることで吹雪を避けた。  
 c. 登山隊は南寄りのルートをとることも吹雪を避けた。  
 d. ?登山隊が吹雪を避けたのは、南寄りのルートをとることだ。  
 (?登山隊が吹雪を避けたのは、南寄りのルート(で)だ。)

このように、同じ「～ことで」であっても、手段を表す場合は、原因を表す場合と異なり、「～で」の形でも「～ことで」の形でも違いはないようである。

これは、「で」に限らず、原因(理由)を表す形式が、格助詞だけでなく、接続助詞で示されることがあるのに対して、手段を表す形式が、格助詞(「で」および複合格助詞「によって」)でしか示されないことと関係しているのではないかと考えられる。

これは、品詞性の問題だけでなく、文の階層性の問題とも関わる。南(1974)の従属節の分類に従うと、原因の「で」がA類に、原因(理由)の「から」がB類に、原因そのものとは言い難いが、根拠の「から」がC類に現れる。また、矢澤(1994:107)の議論においても、「で」が現れる階層によって、「出来事全体が生じる場や原因」や「動作・作用が実現する場や理由」を表すとされる。これに対して、手段を表す成分は、文の複数の階層に現れるというようなことはないだろう。

ただし、このように考えると、原因の「で」と手段の「で」を格助詞として同一視することが妥当であるのかという問題は生じる。

## 6. おわりに

以上、「～で」と「～ことで」について、いずれも格助詞「で」から構成されるものの、まず、原因の解釈の違い（直接的な原因か間接的な原因か）、両者の共起、いくつかの文法的振る舞いの違い（語順、とりたて詞の後接、分裂文による焦点化）から、「～ことで」は、形式的には節を「こと」で名詞化したものに格助詞「で」が伴っているように見えるものの、全体の機能としては「～で」とは異なったものであることを示した。さらに、コト節のテンスの現れ方としては、むしろ「～ので」のような従属節に近い性質を持つのではないかと考えられる。

「～ことで」を一種の従属節と考えた場合、「～で」が格成分であることから南（1974）などのA類に属するのに対して、「～ことで」は、B類以上に属するのではないかと考えられる。ただし、原因を表す成分に関しては、述語に制約があることなどから、現状では、どの段階に属するのか妥当なテストが行えていない。

また、「～ことで」が「～で」とは異なった意味的、文法的性格を持っているとした場合、「ことで」を一種の複合辞として捉えることもできるが<sup>(9)</sup>、ある程度、分析的に解釈することもできるため、これをどのように考えるかは問題となるであろう。

これと関連して、杉本（1993）の「を」についての分析との関係も問題になる。杉本（1993）では、次のような二種の「を」について、「吹雪の中を」のような状況補語と「山中を」のような移動補語は、一文中に共起するものの、「を」自体は、いずれも移動格の「を」と考えられるとした。

(71) 吹雪の中を山中をさまよった。

その際、状況補語と移動補語とでは、構造上のレベルが異なるとした。状況補語も「～ことで」も、「中」「こと」のような形式名詞が現れ、それによって文中での機能が異なるようになることから、類似した現象ではないかと考えられる。「を」の場合と同様、「～で」と「～ことで」の「で」は、同一の格助詞と考えるべきなのか、つまり格助詞自体の機能と句の機能の関係をどのように考えるべきか、問題として残る。

最後に、矢澤（1992）の分析との関係についてふれておきたい。2. で述べたように、次のような文の許容度、取り扱いについて、本稿では見方を異にするが、矢澤（1992）の分析と本稿の分析は、必ずしも背反するものではないだろう。

(72) 大寒波で 多くの人が風邪で寝込んだ。

「大寒波で」のような「～で」の形の成分であっても、ガ格名詞句の前に現れることによって、「～ことで」が持つと同様の解釈が臨時に与えられているのではないかと考えられる。これについても、精査が必要であろう。

いずれも今後の課題としたい。

## 注

- (1) 矢澤（1994）の言うように、出現位置により解釈が異なるため、二重に現れることが文法的ではないまでも許容されとも考えられる。
- (2) この文は、筆者には、若干不自然に感じられる。
- (3) 山田（2003: (15)f.）では、この例を文法的とし、「〔～ことで〕を用いると多少、大仰な感じが否めない（p. (16)）」としている。本稿の分析では、これは単に文体的な問題ではないと考える。
- (4) この文も、以下に述べるような解釈においては、自然になる。
- (5) 田中祐氏（筑波大学大学院生）の指摘では、次のようにしても自然になる。
  - i) 太郎は風邪をひいたことで学校を休めた。
  - ii) 突風が吹いたことで建物が倒壊してくれた。
 i) の場合、可能文とすることで、「太郎」の意志が直接的に出来事を引き起こし、「風邪をひいたこと」は間接的な原因と解釈されることになる。また、ii) の場合も、「～くれる」の恩恵表現を使うことによって、「建物」の自発的な変化が含意され、やはり、「突風が吹いたこと」が間接的な原因と解釈されることになると考えられよう。
- (6) なお、主語との前後関係においては、ガ格で現れた場合と主題として現れた場合では異なり、「～ことで」は、ガ格名詞句より前に現れ、主題より後に現れるのが自然であろう。
- (7) 「によって」のコト節のテンスについては、杉本（2007）を参照されたい。
- (8) ただし、「～ことで」の分裂文による焦点化は、若干不自然になるが、「～で」の場合も同様に不自然になることから、「～で」と「～ことで」で違いがないことに注目し、不自然さは、別の要因によるものであると考える。
- (9) 山田（2003: (16)）は、次のような例を挙げ、「～ことで」の場合、「から」「ので」と異なり、過去の状態をタ形でしか表せないことから、「接続助詞として文法化した形式ではなく、形式名詞に格助詞の「で」がついた複合形式」と捉えている。
  - i) 家が{古い/古かった}から、冬は寒さに凍えていた。
  - ii) 家が{\*古い/古かった}ことで、冬は寒さに凍えていた。

## 参考文献

- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」, 『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』 6, pp.25-37, 九州工業大学
- 杉本武 (2005) 「日本語複合格助詞の格体系における位置づけについて」, *KLS* 25, pp.206-215, 関西言語学会
- 杉本武 (2006) 「「によって」句の用法についての覚え書き」, 『日本語複合格助詞の研究 2』 (平成 17 年度筑波大学人文社会科学部研究科プロジェクト研究「日本語複合格助詞の体系化に向けた記述的研究」研究成果報告書, 研究代表者: 杉本武), pp.47-56, 筑波大学
- 杉本武 (2007) 「コト節をとる「によって」句について」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」平成 18 年度研究成果報告書「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発 I」』 (研究代表者: 田野村忠温, 課題番号: 18061004), pp.141-156, 大阪外国語大学
- 丹羽哲也 (2000) 「副詞につく「は」について」, 『人文研究』 52:3, pp.29-50, 大阪市立大学
- 丹羽哲也 (2004) 「単純提示用法の「は」について」, 『人文研究』 55:4, pp.1-19, 大阪市立大学
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 3 格助詞』, くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店
- 矢澤真人 (1992) 「格の階層と修飾の階層」, 『文藝言語研究 言語篇』 21, pp.53-70, 筑波大学
- 矢澤真人 (1994) 「「格」と階層」, 『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』, pp.101-118, 三省堂
- 山田敏弘 (2003) 「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」, 『岐阜大学国語国文学』 30, pp.(13)-(23), 岐阜大学
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル——格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」, 『日本語の格をめぐって』, pp.39-65, くろしお出版